西中国同和教育交流会

差別の現実から深く学ぶ

広島 瀬戸田の部落で

第28回西中国同和教育交流会が、広島県瀬戸田町「福田ふれあい集会所」で開催され、島根、広島、山口から同和教育に取り組む教職員を中心に30人が参加した。

地元のフィールドワーク、記念講演、実践報告などがおこなわれた。

開会行事のあと、部落解放同盟瀬戸田支部の小西肇・元支部長から「瀬戸田の闘い」と題した記念講演がおこなわれた。

小西さんからは、水平社結成の前夜におきた、瀬戸田の部落解放運動の原点である「みこし事件」を中心に語られた。

この事件を聞き取りして形に残そうと『夕映えにおどる鳳凰』という本を出版した話や、小西さん自身の生い立ち、これまでの瀬戸田の解放運動の闘いなどが語られた。

記念講演のあと、地区内をフィールドワークし、部落の土地の値段は一般地区の5分の1程度、空き家も多くあり、入ってくる人もいないので、多くが倉庫になっていることなど、厳しい土地差別の現実や課題が語られた。

2日目は各県から3本の実践報告があった。島根県立益田翔陽高校の米原勝治さんからは「特別支援学校との交流学習から学んだこと」と題した実践報告がおこなわれた。

交流学習を通して、養護学校に対しての偏見や障がい者に対しての「上から目線」や同情などの差別意識に気づくことができた。また、交流をして終わりではなく、生徒の感想を交流する場などの事後学習の必要性などが今後の課題であることなどが議論された。

山口県宇部市立神原小学校の桂眞理子さんからは「全国水平社の授業実践」と題した実践報告がおこなわれた。

6年生の歴史学習で通史的に差別と人権獲得の歴史学習を丁寧に積み上げた上で、現地で集めてきた様々な資料や写真・ビデオなどを活用し、水平社の授業を実施した。

水平社の授業の後、部落差別を過去の話で終わらせてはいけないということで、最後に子どもたちに今も部落差別と闘っている当事者からの聞き取り学習をおこなった。

広島県立世羅高校の植中正之さんからは「困った子」と題して、前任校の定時制高校での実践が報告された。人とのコミュニケーションが難しく、大人数のところが苦手で、パニックになってしまう生徒と関わってきた実践が報告された。

「困った存在」としてみんなから遠ざけられていたAさん。しかし、本来はAさんがパニックを起こしたときに「困った子」として遠ざけるのでなく、なぜそうなるのか、Aさんの特性に周囲の人間が理解を示すことで、集団の中にAさん自身も入っていけるようになることの重要性が語れた。

Aさん自身の学力保障と進路保障に向けた実践と課題が提起された。

瀬戸田の運動史を語る小西元支部長（前右）

瀬戸田の部落をフィールドワークする参加者

「みこし事件」

瀬戸田の部落の人たちは、地元のお祭りでも、御輿を担がせてもらえなかった。

そんな不合理な対応に対して部落の青年たちが、御輿の一部を壊すという形で抗議をし、やっと御輿を担げることになった。

しかし、部落の中には御輿が入ってこない。翌年も部落の中には、御輿を入れようとしないので、部落の担ぎ手たちが押し込み、初めて御輿が部落の中に入ってきた。部落の人たちは涙を流し喜んだ。長年の夢がかなった。

それまで陰っていた雲から日差しが指して、その夕映えの中に、躍り上がる御輿の鳳凰がキラキラと光った。それが言葉に出来ないくらいきれいで、今でもまぶたの裏に焼き付いている。

新刊案内

『太郎が恋をする頃までには…』（幻冬舎）

猿まわし復活の背景に…

今年10月発行の『太郎が恋をする頃までには…』（幻冬舎）の私小説が、いま話題を呼んでいる。

作者はフジテレビのプロデューサー、現在は新聞記者の栗原美和子。彼女が猿まわし師・村崎太郎と出会い、結婚にいたるなかでの葛藤と部落差別の現実を世に問うた私小説。

内容はフィクションであるが、山口の部落出身の太郎の生い立ちと部落差別についての語りはかなりの部分は事実である。

「太郎次郎一門」をベースに、全国従業などの活動を続け、91年には「芸術祭賞」受賞した太郎、小説では「海地ハジメ」。

猿まわしは、鎌倉時代から続く千年の歴史があり、歌舞伎や能などと同じく、賤民の間で民俗芸能として受け継がれてきた。その復活の背景には、これまで語られてこなかった、部落解放への思いがあった。

彼は成功していくが部落出身ということを名乗れず、苦しんできたこと、この本を出版することで、カミングアウトしたことなど、これまで明かされなかった真実が語られている。

彼が光市の部落に生まれ、厳しい差別と貧困の中で幼少期を送ってきた。彼が高校2年の時、父から言われ、猿まわし師になることを決意する。

栗原美和子

【「我々の歴史を葬ってはいかん。葬るのは逃げじゃ。そうじゃなくて、堂々と自分のルーツを名乗れる、語れる、そういう日に向かって突き進んでいくべきなんじゃ」】【「太郎、お前がスターになれ」「お前というスターが生まれることによって、被差別部落に対する偏見をなくしていくんだ。お前がスターになって、先祖代々続いてきた苦しみを払拭するんだ」】

その一心で、彼は猿まわしを復活させ、国民的な注目を浴びるまでになった。

スターにはなったが…

【「確かに俺は約束通りスターになった」父親と約束したように、猿まわし芸を復活させ、テレビ出演というキッカケを掴み、猿まわしの存在を全国規模で有名にした。「でも本当の意味でスターになったわけじゃない。俺は先祖が誇れるような人間じゃない」】

【「俺は、差別から逃げて来たんだ。東京へ行けば、地元さえ離れれば、自分がどこの出身かだなんて分からなくなる。俺は…被差別者というレッテルから逃げ出したかった。それが本音だったんだ」】

部落出身ということを名乗ることが出来ずに、苦しんだ村崎太郎。自分が猿まわしをここまで復活させ、地位も名声も手に入れたのに、それでも彼自身は解放されていなかった。「隠すのか」「名乗るのか」。自分と同じような思いをしている人がたくさんいる。部落出身ということを名乗っても差別されない社会。そして自分自身がホントの意味で解放されるために、パートナーである栗原美和子とともに私小説を発刊した。

現在、二人は結婚して幸せな生活を送っている。しかし、小説では最後はハッピーエンドではない。結婚差別を受けて最後は別れてしまう。週刊誌『アエラ』（11月3日号）の、二人のインタビュー記事には「いろいろあったけど幸せになれるんだ、では意味がないと思う。僕たちはたまたま幸せな結婚ができた。でもそこに至らない人たちはたくさんいる。それを問いかけるものに」と、厳しい結婚差別の現実があることを世に問うストーリーになった。

体に染みこんでいる詩

最後に太郎が、部落出身ということ、猿まわしを復興させていくなかで、体の芯まで染みこみ、胸を熱くし続けてきた詩がある。

解放運動の活動家だった親が、赤ん坊の太郎を抱きながら、この詩をシュプレヒコールしながらデモ行進をしていた。

「タローが恋をする頃までには　差別のない世の中が訪れますように」

「タローが恋をする頃までには　全ての人間が平等に扱われますように」

「タローが恋をする頃までには　様々な問題が解決されますように」

この詩が問うている現状を、いま一度、みんなで確認したい。山口県の部落問題は解決したのかと。ぜひ、この冬に一読をお薦めします。